

詩同人誌評

第13回

言葉は信用できるか、できないか

中塚鞠子

最近長い詩に飽きてきて、と言うよりごたごた書きつけないと、伝わらないものだろうか、と短詩が好きになってきている。

谷川俊太郎が、一時期短い詩を書きだした『Minimal』を出した気持ちが変わるような気がする。短く的確な言葉で書き、どう伝わるか、あとは読者に任せる、そんな気持ちだ。そして、楽しく書いている詩に出会うと嬉しくなる。考えて書いたものより、多少乱れていても、心が溢れるように書いているものは好感が持てる。

山口洋子「花屋さんには花がいっぱい」(「夜凍河」24号)

もう十二月

ひとつひとつの向き合い

納めていくしかないのにかかっているも

せかせかする

べてるぎうすぶろきおんしりうす
べてるぎうすぶろきおんしりうす
くちにしてみる

(略)

それにしても

私は貧困を書いたことがない

豪語した谷川俊太郎さん

『その世とこの世』で

さよならの代わりにじゃあね
ではまた

と

逝っちゃった

やっぱお洒落

この世は他人だらけである

他人でないのは自分だけだと思う

ええええそうなのでしようそうなのでし
う

(略)

空の詩人が空にかえったの

いいんじゃないの

それで

ね

最近の山口洋子は、今まで見てきた詩と違って、伸び伸びと楽しそうに詩を書いている。

一段と詩の技量があがってきたのを感じる。

谷川俊太郎さんが亡くなって、幾人かの人の挽歌を読んだが、「空の詩人が空にかえったの、いいんじゃないの」のような詩はなかった。なんか谷川さんにぴったりだ。

今回短詩が比較的多かったので挙げてみた。

向川裕章「アンブレラ」(「笛」307号)

まばゆさの中で

失った何かに怯え

しがらみの中で

落ち着く場所を探す

風に流された記憶の

たどり着く先には

今日も雨が降り続く

同じく「孤月」

ため息が薄雲となって

薄ぼんやりと辺りを照らす

夜風が心地よい

瞳を閉じて 待ち人を想う

「孤月」の方は多少凝縮度が足りない気がするが、短詩の良さを生かしてごちゃごちゃ書かないのがいい。「アンブレラ」は失ったものが何なのか、ひよっとすると震災で失った

家や人なのかもしれないなどと想像する。
「今日も雨が降り続く」が効果を出している。

北口汀子「溺れる」(「RIVIERE」19号)

時々私は海の底に沈む
浮遊感に包まれながら落ちていく事に気付く

あるいは既に海の底に横たわっている事もある

記憶の欠片は微生物の死骸の様に降り注ぐ
埋もれながら私も記憶の欠片となっていく

同じく「抗う」

海底で朽ちていくのは生き物ばかりではない
い

岩でさえ歯軋りしながら朽ちていく
そして記憶も なのに

私が躓いた記憶の欠片は時折夢を引き裂き
私を今朝の汀に目覚めさす

字数のせいでバラバラに見えるが、二篇どころかも五行詩。この人はいつも短詩だ。エッセイや書評も書いているから長いものが書けない訳ではない。凝縮した短い形が好きなのだと思う。この人の短詩が気に入っている。

森木林「たどるは蝶は」(「Rosa-Kerne」9号)

たとえば蝶は

サナギに溶ける前のじぶんを
おぼえているだろうか

異なる^{カタチ}形態で
異なる領域で

ひらひらひらと 夏空たかく

いまは
ふしぎ時空に 舞い上がり

たとえば蝶は

同じく「ねじれの位置」

このままが
よいのです

決して 交わらない
へねじれの位置▽

お互いが お互いの
絶妙な 立ち位置で

お互いが お互いの
斜め上下に 突き抜けて

お互いが お互いに
へ在る▽ ことだけは 識っていて

たしかに、ちょうちよやトンボや蝉など、
変態するものは実に不思議である。葉っぱの上で、水の中で、また土の中で、生きていて、
羽が生えて空中を飛び回る。人間でも、赤ちゃんと水の中で暮らしていて、生まれたとたん口を開けて肺呼吸をし出すのも実に思議だ。
今さらながら。それを不思議と思わないで生きていくことこそ不思議なことだ。

ねじれは数学的、哲学的、また人間的命題であり、これも面白い。

左子真由美「アデイ」(「イリヤ」25号)

その時男の声で
アデイ と誰かが呼んだ

夜更けのメトロで
そして

どこからかジャスミンの甘い香りがして
赤いヒジャブで顔を覆った娘が
ホームを急ぎ足で駆けて行った
声の主を振りきるように

それは
旅の日のこと

(略)

ときにひとはそうやって
夢中で誰かの名前を呼ぶのだろう

(略)

旅先の異国の町で、映画のワンシーンのよ
うな出会いをした。なんだかワクワクする物
語が、あるいは危険な物語がありそうな気配
がする。ふっと耳にしたその呼び声で、詩が
生まれるのだ。左子真由美の詩は、シャンソ
ン風もいいが映画のようなストーリー性の詩
もなかなかのもの。

尾崎まこと「一行」(「イリヤ」25号)

生きろ とは

わたしにとつて

励ましではなく

呪いであつた

呪いが解けるとき

わたしという情けのある

筆をおくことにしよう

最後の詩の一行として

胸の上で手をむすび
嘘のないこの体を
この星に横たえたい

この詩と同時に「イリヤ」には「人生」と
いう詩も載せている。なんだかいつもと違う
感じがした。まだ若い尾崎まことに、人生論
などを書いてはしくなかったのだ。

水間敦隆「風の子感」(「さんが」14号)

コツコツ歩く

ポツポツがついてくる

歩いてかたわらに

無言のまま 手も握らず

愛しい足音のけはいを感じ

そつと

名前を呼んでみる

(略)

音もなく風がながれ

ふと、呼びかけられたような

そんな気がしてふり返ったけど

記憶の底からなじんだ声が

落ち葉にくるまり

足もとで

スキップしている

素敵な恋愛詩だと思う。かたわらについて

くる気配のある足音、呼びかけられた気がし
てふり返るがいない人は、はるか昔に別れた
恋人かもしれないし、ひよっとしたら亡くな
った母親かも知れない。姿を想像するのは読
み手の自由である。読み手は自分の生活に沿
って詩を読む。それでいいのだと思う。

吉川伸幸「今夜は月が出ない」(「三重詩人」 267号)

今日は帰らない

とだけ告げて

コドモとダンナを置いてきたという

海辺のカフェの席に

屈託のない笑顔を演じて

君はかけていた

(略)

あの頃

潮の薫るカフェには

二つの空席が

月に照らされているばかりだった

(略)

岸辺にいくつも白波が走る

君の耳元からいい匂いがして僕はむせる

潮が満ち

夕闇が迫っている

今夜は月が出ない

過去に切ない長い物語を引きずっているように見えるこの海辺のカフェでの男と女の邂逅は、「今夜は月はない」というタイトルが結末を示しているのだろうか。しかし、君は「降りることはない」「うつむくことはない」というから、複雑な絡み合った心理状態なのは僕の方だけなのではないか。そのあたりが面白い。

滝悦子「唄」〔夜凍河〕23号

いま何時？
それだけのために
六叉路のふたつめの
この細い坂道を上ってきた

ふり返る度に湾岸線は伸び
(略)

お土産は二匁の朱い和ろうそく
太い炎が
生きているように笑っているように揺れ

速い灯りも
誰かの唄もささいなことばさえ燃えるから
夜が明けたら
坂道いっぱい
ケイトウの種を蒔きにいこう

どんな唄が聞こえるだろうか。坂道を上った先には何があるのだろうか。朱いろうそくは「赤い蠟燭と人魚姫」を思い起こさせるから不吉な唄が聞こえる気がする。夜が明けたらケイトウの種を蒔きにいこう、で一気に逆転させる。はて？理解はできないが、気になる詩である。

坂本達雄「八月の少年」〔KAIGA〕127号

少年はすでに将棋の駒を握りしめている
抑圧されていた民族が立ち上がろうとする
時には
格闘する駒に自らを重ねるのである
(略)

飛び道具の類はそれぞれに工夫して作るの
である
ミサイルと呼ばれるものもある
それは鳥の羽をいくつも張り付けてあり
滑空して敵の喉元へと飛んで行くのである
少年はまだ敵の死体と言うものを見たこと
が無い
林の終わる処で戦闘がおこなわれ
(略)

そこへ行かされた少年たちは、野犬どもが死体をあさっているのを見たが、野犬が怖く

て近づけないのだ。少年は駒を握りしめる。

この詩は一体何を意味しているのだろうか。今日でもし戦争が起きたなら、鳥の羽のような無力なミサイルで、駒を握りしめた臆病な少年たちが大人たちによって戦場に送り出される、そんなパロデーなのだろうか。「七月の少年」「九月の少年」もあるが、これらはなかなか、謎めいて、恐ろしい詩群である。

【受贈詩誌】

「ア・テンポ」66号・「石ノ森」202号・「要りや」25号・「イルカと錨」2期3号・「アリゼ」222・223・224・225号・「風のたより」27号・別冊・「KAIGA」127号・「gaga」28号・「GAGA」91号・「交野ヶ原」98号・「黄薔薇」224号・「CROSS ROAD」24号・「さんが」14号・「軸」153・154号・「仙台文学」105号・「タルタ」64・65号・「玉蘭」11号・「多島海」46号・「潮流詩派」279・280号・「月の村壺番地」16号・「天国飲屋」6号・「飛脚」48・49・50号・「ひやつか」2号・「ブライム」57号・「笛」307号・「ぼとり」76・77号・「三重詩人」267・268・269号・「Messier」64号・「木想」15号・「夜凍河」23・24号・「梨翠書」21号・「RIVIERE」197・198・199号・「歷程」619号・「Rosa」Kernel」6号